

人生という旅の途中、  
この社会を問い直すための本との出会いを！

# にじ色の本棚

原ミナ汰 編著  
土肥いつき

—LGBTブックガイド—

Lovely Great Book Tour

性的マイノリティは多くの誤解や偏見にさらされています。性的指向や性別違和に戸惑い、悩み、孤立している子どもたちがたくさんいます。

46人の案内人が、LGBT当事者に「ひとりじゃない」というメッセージを贈るために、家族や教職員などが性と生の多様性について理解を深めるために、性的マイノリティについて書かれた（自伝的ノンフィクション、漫画、小説から社会・歴史書まで）、ジェンダー・セクシュアリティに関するおすすめの本を紹介し、

さあ、あなたも「Lovely Great Book Tour」に出てみませんか？

## もくじ

- 第1章 「ひとりじゃない」ことがわかる本
- 第2章 LGBTってなに？の疑問に答える本
- 第3章 LGBTとカルチャー
- 第4章 暮らし、健康・医療について考える本
- 第5章 より深く知りたい人のために
- 第6章 サポートする人に読んでほしい本  
性的マイノリティ関連の年表

〈編著者〉

原ミナ汰

(NPO 法人共生社会をつくるセクシュアル・マイノリティ支援全国ネットワーク代表)

土肥いつき (トランスジェンダー生徒交流会世話人)



A 5判 ソフトカバー 208頁  
ISBN978-4-380-15006-7 定価:本体1700円+税

書店でご注文いただけます。またはこの下をFAXでお送りください

ISBN978-4-380-15006-7 C0036 A 5判・ソフトカバー・208頁 © 定価:本体1700円+税

## にじ色の本棚

—LGBTブックガイド—

原ミナ汰、土肥いつき編著

◎ご連絡先 ( )

本書を【 】冊注文します。

◎お送り先住所 〒 -

◎お名前

様

1月上旬発売

三一書房

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-1-6  
電話: 03-6268-9714 HP: <http://31shobo.com/>

FAX: 03-6268-9754

## ムーミン谷からのメッセージ

『ふしぎなごっこ遊び』（ムーミン・コミックス第12巻）

トーベ・ヤンソン著、ヤンソン著／高橋真知訳

『ムーミンの生みの親、トーベ・ヤンソン』

トワーク・カルヤライネン著／セルボ貴子／五十嵐洋訳

「いちいち深刻に考えすぎね。イヌだのネコだのって…。なにかがすぎて気持ちこそたいせつなもの」

（『ふしぎなごっこ遊び』より）

犬は猫が好きだった。そのことは、犬にとっては大きな悩みだった。

「イヌのくせに、ネコが好きなんでさ…」

人生に絶望し、恥ずかしさのあまり、とうとう顔にマスクをかぶる犬に、ムーミンママがつぶやく。

「イヌだのネコだのって…。なにかがすぎて気持ち

こそたいせつなもの」

これは、『ふしぎなごっこ遊び』に出てくる場面のひとつだ。物語の作者であるトーベ・ヤンソンはバイセクシュアルで、男性に惹かれたこともあれば、女性に恋をしたこともあった。猫が好きで犬のエピソードは、同性愛をモチーフにしたものとして読むことができる。



河山書房新社、2014年



筑摩書房、2001年

トーベは、1914年にフィンランドに生まれた。今では母国の代表的な作家のひとつとして知られる彼女は、芸術一家の愛娘として、幼い頃から才能を発揮してきた。トーベにとって、世界はいつもリタリクしたもの満ちていたが、彼女が生きた時代は社会の間も深かった。

ナチス・ドイツが暴威をふるい、戦争が人々を引き裂く時代が来ると、彼女はヒトラーの風刺画を描いた。同性愛が「犯罪」とみなされた時代でも、彼女は愛する人との素晴らしい時間をそのままに迎え入れた。その成果はムーミン作品に反映されている。ムーミン谷のスナフキンやトゥーティフキ（おしゃまさん）は、彼女が愛した

生きることのほうが、ずっと大切なことだった。ムーミン作品のなかには、ミスティアスなキャラクターが多い。ヘムルの一族は、男性でもスカートをはく。ムーミンパパとママの違いは、シルクハットとエプロンだけ。全体的に性別のわからないキャラクターが多い。そんなムーミンの作品には、今も昔も、子どもたちから、たくさんさんの賞賛が寄せられる。「このキャラクターの性別はなんですか？」と、そんなとき、プロダクションのスタッフは、このように返すそうだ。「そういう型にはまったことは重要ではありません。大切なのは、ひとりぼっちの小さな生き物がいないかどうか、ということなんです」。

実在の男性や女性をモデルとしている。ムーミン谷の男性や女性をモデルとしている。ムーミン谷の男性や女性をモデルとしている。ムーミン谷の男性や女性をモデルとしている。

ムーミン谷の生き物たちの振る舞いや個性は、それぞれ尊重されている。愛らしい者も、ひねくれ者も、みんなが夢中になって暮らしている。人間社会も同じようであってほしい。LGBTというカテゴリーを線引きは、多様性を理解するために便利ではある。しかし、本当に大切なことはシンプルだ。人が、その人のままでいられるかどうか、ひとりぼっちでないかどうか。トーベ作品から私たちが学ぶことはたくさんある。

## ◎本書の執筆者一覧◎

- 池上千寿子／池田 宏／石川大我／イタヒロユキ／犬童一利／岩川ありさ／岩本健良／ジエームズ・ウエルカー／榎井 縁／遠藤智子／遠藤まめた／大江千東／川端多津子／木村一紀／樹村ゆうかり／小林ヒロシ・りょう子／さくら／佐々木美宇／佐々木裕子／執行照子／篠原美香／下平 武／高橋慎一／高橋裕子／土屋ゆき／中田ひとみ／東 小雪／東 優子／深見 史／古堂達也／堀川ユウキ／松岡宗嗣／水野哲夫／三橋順子／百瀬民江／森 あい／森 雅寛／Yake／山賀沙耶／ゆづこ／ヨヘイル／Y・クララ／脇野千恵／渡辺大輔

## 自身と向き合いながら性別を「放浪」する

### 『放浪息子』

志村貴子

### 『オツパイをとったカレシ』

戸沢由紀子

「高槻さんは男に間違われるために男物の服を着るの？ だとしたらそれってただの変装ね」（『放浪息子』より）



講談社、2002年



エンターブレイン、2003年

右に引用したのは、『放浪息子』のなかの言葉だ。千葉さおりのその言葉に、男の子になりたい女の子である高槻よしのはたじろいだ。そして彼女と同じく動揺したのが、男子時代の私だった。当時私はこの作品に感化され、女の子の服を着て友達と遊びに行くことを繰り返していたのだが、徐々に自分が本当に女の子に見えるかばかり女の子の服を着ることの意味を見つけた。

右に引用したのは、『放浪息子』のなかの言葉だ。千葉さおりのその言葉に、男の子になりたい女の子である高槻よしのはたじろいだ。そして彼女と同じく動揺したのが、男子時代の私だった。当時私はこの作品に感化され、女の子の服を着て友達と遊びに行くことを繰り返していたのだが、徐々に自分が本当に女の子に見えるかばかり女の子の服を着ることの意味を見つけた。

生活するなかで、息をするように無意識下で選り取っていくものがある。たとえばくさや口調、読む本や見るアニメ。私の場合、その延長に女の子の服があるのではないかと、そう思った。女の子になりたいからでも、女の子に見られたいからでもない。無邪気にスカートをはいて家族の前で踊っていた、幼い頃の私と本質は同じだった。「ありのまま」の姿を見せたいのではなく、「ありのまま」のことがしたいだけ。私が「あたりまえ」に自分であるために、それは必要な要素だったのである。

幼い頃から自分が生まれ持った性別に違和感をもつ主人公は、乳房切除手術を受けるために高校時代からお金を貯め、高校卒業と同時に上京する。上京してからはオツパイで働き、自分と同じ性別・性障害で女性から男性に社会的に性別を変えて働いている仲間と出会う。主人公の葛藤や思いなど、自分と重なる部分が多々ある作品で、思春期の私にとっては指標となる作品である。SRS（性別適合手術）まではせず、タイトルどおり「オツパイをとった」ところで物語が終わるところも当時の私にとっては衝撃的だった。性別・性障害の主人公が自らの心の性で生きていく、というところを歩